

佐賀大会の思いで

宮脇博巳(佐賀大学)

研究会のご発足20周年誠にありがとうございます。

佐賀大会の前年、北海道の釧路からお帰りになった岩村政浩氏が「えらい物を、引き受けてしまった」と切り出したところから、皆様とお知り合いになる物語が始まったわけでした。

暑いさなかに、賑やかに佐賀平野のヒシモドキ、オニバス、ヒメコウホネ、シチメンソウなどを観察できましたことを昨日のように思い出されます。

裏話としては、宿泊場所とした某ホテルに岩村氏の長年の人脈があり、信じられない格安の料金でマイクロバスを調達出来たことが大会成功の秘訣でした。さらに、私として最も感動したのは会

員の皆様が、佐賀平野で何十年ぶりに発生したオニバスの葉と花を観察している間の出来事でした。その時、下見の時に掛け合った区長さんの指示通りにマイクロバスを所定の場所に移動をお願いしていたのですが、その際運転手さんが「佐賀のクレークの植物を見に日本全国からこんなに来られることを知りオイ(佐賀弁で”私”のこと)はうれしか。今まで知らんやたったが、本当に郷土の誇りです」と涙を流されんばかりに語られたことでした。

早いものであれから6年、私が知る限りではあの地点ではオニバスはその後発生していないようです。当分種子で休眠状態の様です。

水草研究会全国集会誘致の残したものの

富沢日出夫(霧多布湿原センター)

はじめに

今考えてもとてもハラハラドキドキの全国集会誘致だったと思います。学会や研究会に参加した経験はありましたが、その運営となるとまったくの素人でした。よく準備が出来たものだと我ながら感心しているところです。

「学会で町おこしをしよう！」などという不純な(?)動機ではじめた誘致だったのですが、偶然にも第20回目の記念すべき全国集会を引き受けることになり、大変良い経験が出来たと喜んでいきます。すでに研究会誌々上で紹介しましたが、私たちの町での全国集会の誘致は私の上司の一言で始まります。「学会って一種のエコツアーだよな〜……」。今回はその背景となる町の事情や、私

の個人的な事情等の裏話をお話したいと思います。

霧多布湿原の保全に向けて

私の住む浜中町は人口8,000人に満たない、道東に一般的にみられる漁業と酪農業が基幹産業の過疎の小さな町です。そこに私の勤務する霧多布湿原センターが建設されたのは、ラムサール条約締約国釧路会議が開催される平成5年のことでした。霧多布湿原センターは、霧多布湿原や町内の自然環境の保全を通じた地域の活性化をねらっており、守備範囲が極めて大きく、自然環境に関する教育普及活動から、地域活性化のための事業、さらには地場産品を利用した新商品の開発まで、

ありとあらゆるものが仕事になってしまうのです。

一方、ラムサール条約はご存じのとおり、湿原のワイズユースをうたい、自然と人間との共生を掲げる国際条約です。我が町の霧多布湿原もこのラムサール条約に登録され、我が町の湿原も国際的だ!などと単純に喜んでいたのですが、この条約のもつ意味はけっこう重いものがありました。私たちの町は「自然との共生」を課題として突き付けられて来たのです。

自然との共生と一言でいっても難しいものがあります。浜中町は元来、酪農と漁業を中心産業とした町です。つまりもともと自然との共生により成り立ってきた町とも言えます。しかし、これも、第1次産業が元気な時代はまだよかったのかもしれませんが、すでに周知のとおり現在の農業も漁業も、お世辞にも元気があるといった状態ではありません。

こうなってくると、なにも無い田舎町でよくあるケースとしては「大型リゾート開発」なんていうものが安易に採用されてしまうでしょう。山岳地域であればスキー場に大型ホテル、平野部であればゴルフ場建設……と「破壊」の構図が見えて来てしまいます。

幸いにも私たちの町では、当時の町長であった渡辺さんが「わが町にはリゾートはいらない」とリゾート開発にたよらない町作りを政策としてかけたのでした。なおさら、自然との共生をはかる新たな産業構造が必要となってきます。私たちは、その一つの形として「エコツアー」の可能性を考えました。一口にエコツアーといっても色々な形態があり、掴みどころのないものというのが現実です。さらに欲張りな私としては、浜中独自のスタイルを構築したいと考えていたところでした。

学会誘致に向けて

そんなところで、例の上司の一言がありました。学会を一つのエコツアーにとらえ、全体をコーディネートしていく。スタディー型であり、体験型で

もあり、かつ地元への教育普及効果が高く、経済効果も期待できる。まさにこれこそ、私の望んでいるエコツアーのスタイルです。

幸いにも浜中町には霧多布湿原ファンクラブ（現在、NPO 法人霧多布湿原トラスト）や浜中21世紀プラン会議（21世紀になっちゃったので解散）といったエコツアーやエコミュージアムに関心の強いグループがすでに存在していました。私はそのグループのメンバーに相談しました。「ところで、学会ってどうやって開催するんだ?」と指摘をうけて、私はちょっと困りました。そ～言えば学会には参加したことはあるけど、開催スタッフとして参加したことはありません。なにはともあれ、学会コーディネイトの経験を積むことが先決だと感じた訳です。

しかし、学会コーディネイトといってもいきなり日本生態学会全国大会クラスの大規模なもののコーディネイトなんて不可能です。私の町でも開催できる規模の学会や研究会はないものだろうか? いろいろな学会を候補として考えました。日本生態学会北海道地区会、森林計画学会等……でも規模、内容の面からどれもフィットするものはありませんでした。

田舎の学芸員の悩み

私の個人的な事情も研究会誘致を行う大きな理由と成り得ました。これもよくある話ですが、小さな田舎では、この「研究機能」が浮いた存在になってしまったのです。地域経済になら役立たない。地域住民の生活とは無縁のもの。そんな学術研究にお金をかけるなんざあ～もったいない。こんな意見が町のあちこちから聞こえて来ました。ついには上司もそんなことを口走るようになってしまったのです。小さな町の施設であれば、どこも事情は似たようなものなのでしょうが、研究者を自認している私としてはこれは放置出来る問題ではありませんでした。

通常は、ここでそのような町民世論に押されて

しまい研究機能を縮小してしまうものです。そして、せっかくの学芸員の専門的な知識も生かされず、立派な施設も宝の持ち腐れになってしまうのが普通でした。日本には、そんな施設はごまんとあります。霧多布湿原センターをそんな施設にしたいはありませんでした。

学術研究は世間とはかけはなれた存在です。漁師さんや酪農家の方は、自分の生活に直結したものでないと反応しません。ほっておけば、「関係の無いこと」として、どんどん遠い存在になってしまいます。

学術研究と地域住民の利益が結び付くなにか良い手はないだろうか？ 自問自答する日々が続ききました。私の研究が直接地域住民の役にたつようなことであれば申し分ないのですが、どう考えても植物生態学は直接は「お金」にはなりません。ど~しようか？ そんなことを悶々と考えながら、日々業務に追われていたのです。

学会や研究会の誘致はこのような事情からも極めて有効な手段だったのです。

水草研究会全国集会誘致へ

幸いにも私が勤務する霧多布湿原センターでは「霧多布湿原学術研究助成」という事業をおこなっており、業務としてさまざまな研究者の方と接点をもつことができました。そんな中で出会ったの

が角野さん、国井さん、下田さん等、水草研究会の三人でした。上司の例の一言「学会って一種のエコツアーだよな〜」があったのもこのころで、私の心は「水草研究会全国集会誘致」に傾いていったのです。

この後のお話は以前、研究会誌上で紹介しました。皆様のご協力で集会は無事終了することができました。でも私の本当の仕事はここから始まったのです。

全国集会が終わって

集会にかかった費用等の清算を済ませてみると、もくろみどおり町への高い経済効果が確認されました。今度はこれを役場幹部へ報告です。「100人前後の小さな研究集会でこれだけの経済効果が生まれたのですから、正規の学会などではもっと大きな効果が期待できます。」と吹聴してまわったのです。ついには、町議会でも所管課長が「水草研究会を誘致したら効率の良い経済効果と、自然教育の啓蒙普及に大きく貢献があった」と議会答弁をするまでになったのです。

このせいか、「研究者が来町」といった現象には、町の人は随分と寛大になってきたようです。人目を避けて、採水用の注射器とビニールチューブを抱えて湿原に出向いて行ったのがウソのようです。なんとなくですが、「調査研究」がある種



写真1・2. ヤチボウズ

の市民権を得ているようです。

外来の研究者も増えました。町内のとある宿のご主人のお話です。「湿原センターが出来てからなんだか『学者』っていう人が随分と来るようになった。難しいことはよくわかんないけど、若い学生さんを沢山連れて、長いこと泊まってくれるのはありがたいもんだ。」

これから……

ここまで読んで来られたかたは「調査研究も市民権を得て、研究者が沢山来町するようになって、すべて富沢さんの思う壺じゃ～ないか!」とお思いになる方も多と思います。しかし、状況はそ

んなに単純ではなかったのです。

研究集会開催後、湿原センターに開催の打診のあった学会または研究会はほとんどありませんでした。つまり、水草研究会開催以降、開催することができた研究集会は無いのです。当初の目的にしていた「学会で町おこし」なんて程遠い状態です。

幾つかの学会にこちらから打診をしてみたのですが、「霧多布でやってもいいよ」なんて気前の良いことを言ってくれる学会は皆無でした。まだまだ知名度が足りないのか、実力が無いのか、ともかく学会誘致も一筋縄ではいきません。

こうなったら、また水草研究会を霧多布でやってくれないかな～などと思う今日このごろです。

水草研究会第19回全国集会（徳島）について

木 下 覺

1 開催までの経緯

「水草研究会第19回全国集会を徳島で開いてほしい。」と事務局の角野康郎氏から依頼されたときは、内心困ったことになったと思った。なぜかという徳島には水草研究会の会員は自分一人しかいなかった（小川氏が入会していたことをその時は知らなかった）し、当時水草についての関心は徐々に高まっていたものの、徳島ではまだ興味を持って調べている人も殆どいなかったからである。その上、水草研究会は全国的には会員が増えていて、参加者を運ぶには貸し切りバス2台が必要であること。さらに、これだけの人数が貴重種などの採集をすると、その行為を非難されてマスコミ等に通報されると、会に多大な迷惑がかかる恐れがあるなど、いろいろなことが心配になってくるのである。すぐに返事はできないので「自分の一存にはいかない」ということで、その場は「引き受ける」という返事ができなかった。しか

し、徳島県植物研究会などの組織もあるので、みんな協力すれば何とかかなと思っていたし、当時「吉野川第十堰の可動堰建設」の是非についての問題が全国的に注目されていたので、吉野川をはじめ、徳島の河川や水草の現状を見てもらうのに良い機会であると考えていたので結局は開催させていただくことになった。

徳島で開催するとなると、次にどこを見ていただくかということが問題であった。大きな湿原のように1カ所に豊富な水草があるような場所は徳島市周辺にはないので、県内各地の河川や池沼に点在している水草を限られた時間に移動して案内することになる。バス2台が駐車できて、80名近い人数が観察するのに適した所となると場所は限られてしまう。水草の豊富に残っているため池等是非案内したい場所もいくつかあったが、バスを下りてからの距離と時間の制約があり断念せざるを得なかった。結局、鳴門市のハス田に生育して